

## 抽象の階きざはし

——D. H. ロレンス初期詩篇に関する断想——

斎藤 昭 二

### I

ペンギン版 *Selected Poems* (1972) に付した “Introduction” において、編者 Keith Sagar は「ロレンスは1000篇近くの詩を書いたが、そのうちのかなり高い割合の作は失敗作と言わざるを得ない。彼は選集で読む必要がある。」<sup>(1)</sup>と述べ、D. H. ロレンス (David Herbert Lawrence, 1885—1930) の詩を選集で読むことを勧めている。

失敗作、即ち初期の詩の多くにおいて、何故作者ロレンスの感動が読者に伝わらないのか——この原因をひとえに読み手の側の鑑賞力の凡庸さとそれをもたらす人生経験の不足に帰してしまうことはやはり不当であり、むしろこの点にこそロレンスの創作上の本質に関わる問題があると思われる。読者の共感よりも優先すべき急務が何か当時の彼にあったのではないだろうか。

この小論では、この問題を、「悲しみ」を扱った初期の詩を数篇考察することにより考えてみたい。

### II

ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857—1913) の『一般言語学講義』<sup>(2)</sup>によれば、人間の言語活動は次のようなプロセスを踏むという。

…いま甲乙ふたりの人間が会話をするとせよ：循環の起点は、一方

の人・たとえば甲の脳のうちにある、そこで、われわれが概念とよぼうとおもう意識事実が、それらの表現に役立つ言語記号の表象すなわち聴覚映像と連合する。いま、ある与えられた概念が、それに対応する聴覚映像を脳の中で放ったとする：これはまったく心的な現象であり、それにまた生理的過程がともなう：脳が発声器官にたいして、くだんの映像と相関的な刺激をおくるのだ；ついで音波が甲の口から乙の耳へと伝播する：純粹の物理的過程。つぎに、循環は、乙において、逆の順序を通して続行される：耳から脳へ、聴覚映像の生理的伝達；脳におけるこの映像とそれに対応する概念との心的結合<sup>(3)</sup>。

即ち聞き手は、話し手のたどる言語活動のプロセスを逆にたどることにより（物理的過程→生理的過程→心的過程）、話し手の抱いた概念を了解するというのであるが、文学の成立もこれと類似のプロセスを踏むのではないだろうか。詩人はまず自己の具体的な経験に触発されて、ある感懷なり考えなりを抱く。次にこれを第三者にも意味を持つような普遍的思想にまで抽象化する。経験の思弁化、あるいは抽象化の階段を登りつめるわけである。そしてこれを意志伝達の媒体である言葉に置き換えて表現する。逆に読者は言葉という表現手段で示された抽象的思考を、作者の創作の機縁となった経験と類似の自己の経験にひきつけて読み感動する——即ち作者と類似の感慨を抱くのである。言ってみれば、さきの階段を抽象の段階から具象の段階まで降りてくるわけである。こうして初めて文学が成立する。

勿論、こうした考え方は極端な単純化であり、実際の文学経験にはより複雑な要素が関わってくるであろうし、このプロセス以外の文学経験もあるだろう。しかし、少なくともこの考え方はある種の作家の特質を調べる一つの有効な方法ではあると思われる。以下、この方法を一つの試金石として、ロレンスの初期の詩の特質を考察してみたいと思う。

## Ⅲ

上で述べた文学成立の観点からみると、ロレンス初期の詩はどのような特質を持っているのか。両親の不和に心を痛めた自己の少年時代の「悲しみ」をロレンスは次のようにうたっている。

## DISCORD IN CHILDHOOD

OUTSIDE the house an ash-tree hung its terrible whips,  
And at night when the wind arose, the lash of the tree  
Shrieked and slashed the wind, as a ship's  
Weird rigging in a storm shrieks hideously.

Within the house two voices arose in anger, a slender lash  
Whistling delirious rage, and the dreadful sound  
Of a thick lash booming and bruising, until it drowned  
The other voice in a silence of blood, 'neath the noise of  
the ash.

この詩には創作の時点から眺めた子供時代の回想が二つ述べられている。一つは、風の強い晩に、戸外でトネリコの枝が鞭打つような鋭い音をたてていたということ。そしてもう一つは、両親の夫婦げんかの様子である。

そしてこの二つが並列に置かれていること、及び後者が前者の比喻をもって表現されていること（例えば母親の金切り声は 'a slender lash' で、父親の野太い声は 'a thick lash' でそれぞれ表わされていること）から判断すれば、この二つが、少年時の作者の心中において、ほぼ同等の位置を占めていたと思われる。

主題は幼い頃の自分の小さな心を痛めた両親の不和を提示することであるのは明かだから、作者のねらいは前者の比喻を用いて後者の主題を効果的に述べることであろう。即ち、少年期の作者にとって、

両親のいさかいは、戸外でトネリコの枝が鋭い音をたてて打ち震えるように、恐怖をかきたてる抗しがたい存在であったということである。

しかし、この意図的な技巧にもかかわらず、この詩が今一つ切実なものとして読む側に訴えかけてこないのは何故か。ごく一部の幸福な家庭に育った子供を除けば、両親の争いに小さな心を痛めた経験は大方の子供にとって一・二度はあるものだから、素材自体は確かに多くの読者に訴えかける可能性を持っている。しかし、ここに読者は作者の素材に対する態度をも併せ読んでしまうものなのである。クリーアン・ブルックス (Cleanth Brooks, b. 1906) も言うように、詩において伝達されるものは、論理的にパラフレーズできるものだけではなく、事物に対する詩人自身の関わり方 (attitude) も含まれているのである<sup>(4)</sup>。

この詩に読みとれる作者の素材に対する態度は、対象を客観的に観察し得る心のゆとり——両親のいさかいから戸外のトネリコの風鳴りを連想する心の余裕——なのである。が、大方の子供にとって、両親の不和は最大の悲しみであり、それに直面したなら、無我夢中で泣きだすだけであって、ましてやトネリコの風鳴りなどを連想することはしない。この普遍的と思える子供像が描ききれていない点が読む者の共感を今一つ欠く原因と思われるのである。

つまりロレンスは経験に触発された詩想を普遍的に訴えかける程度にまで煮詰めてはいない、言い換えれば、さきの抽象の階を登りつめていないのである。

#### IV

勿論、この抽象の階を登りつめることに成功している作もある。同じく「悲しみ」を素材とした“Sorrow”という詩である。

#### SORROW

WHY does the thin grey strand

Floating up from the forgotten  
Cigarette between my fingers,  
Why does it trouble me?

Ah, you will understand;  
When I carried my mother downstairs,  
A few times only, at the beginning  
Of her soft-foot malady,

I should find, for a reprimand  
To my gaiety, a few long grey hairs  
On the breast of my coat; and one by one  
I watched them float up the dark chimney.

主人公は煙草から立ちのぼる白い煙を眺めているうちに、ふと心痛む思いにかられる。そしてその理由に思い到ると、それを6行目から11行目にかけて説明する。即ち、母の病がまだ始まった頃、数回だが母を支えて階下に降ろしたことがあった。その際母の白髪が自分の上着にまつわりつき、それがまるで母を顧みぬその頃の自分に対する非難の顕われのように思われたというのである。そして、その母も今はいない。

立ちのぼる煙草の煙と白髪束との類似から連想が過去へととんだわけである。そしてこの母を亡くした「悲しみ」は、さきの“Discord in Childhood”の悲しみとは違って、一般の読者にも切実なものとして訴えかけてくるものがある。何故か。それは3行目から4行目にかけての‘the forgotten / Cigarette’という一句に作者の態度 (attitude) が明瞭に読みとれるからである。

白い束の連想から母の死を思い出した主人公は茫然自失として指にはさんだ煙草のことを忘れてしまっている。逆に言えば、それほど母の死が主人公にとって悲しいものであったことが間接的に、そしてより効果的に表現されているわけである。室生犀星も、愛する息子の死

に際して、その悲しみを「耐へがたくなり／煙草を噛みしめて泣きけり」<sup>(5)</sup> という一句に結晶化させている。火のついた煙草の存在を忘れることも、また思わず煙草を噛みしめてしまうことも、尋常の心境では考えられないことなのである。

母の死という極めて私的な悲しみを ‘the forgotten / Cigarette’ という一句を用いることによって抽象化し——即ち、より広く、愛する者の死の悲しみを想起させるものとして——作者以外の者にも訴えかけるものにまで普遍化している。つまりさきの抽象化の階を登ることに成功しているのである。

## V

ロレンスの初期の詩をいくつか読んでみると、この抽象の階を登りつめることに成功している作と成功していない作とが玉石混淆のようにまじっている。何故か。作者が未熟であったと言ってしまうえば話は簡単だが、原因はどれもそればかりではないような気がする。

この点で洞察に富む発言をしているのは、自身詩人でもあるロレンス研究家トム・マーシャル (Tom Marshall, b. 1938) である。彼はさきの “Discord in Childhood” という詩について、「魂の進展は個人のアイデンティティー探究の観点から見ることができる。如何にすれば人は自己の精神を形成する様々な対立する要素から調和と全体性を作り出すことができるか。これは基本的かつ普遍的な問題であるが、人はこの問題に対してそれぞれ独自のアプローチの仕方を示す。D. H. ロレンスならば、彼の幼年時代を支配したあの悲痛な争いを検証せざるを得ないだろう」<sup>(6)</sup> と注釈をつけている。つまり、一般の共感を今一つ欠くと思われたさきの “Discord in Childhood” という詩において、実は作者ロレンスは、自己のアイデンティティーをつきとめるために、彼の幼年時代を支配していた要素の一つである両親の不和を検討せざるを得なかったというのである。

こうした観点を与えられてみると、ロレンスの初期の詩の多くの主題が極めて彼自身の実生活に密着したものであることに気付く。前世

紀末のノッティンガム方言を記録する言語学的価値しかもたないとい見思われる“A Collier’s Wife”という詩も、彼自身にとっては、一度は振り返って考えてみなければならない自己の形成要素の一つであったのであろう。読者の共感よりは自己のアイデンティティー探究の方がより急務であったという意味で、初期のロレンスは、自己の詩が personal になることを極力警戒した T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888—1965) とは対照的に、極めて personal な詩人であったと言えるのではないだろうか。

## 〔注〕

- (1) “Lawrence wrote nearly 1,000 poems, and we must concede that an unusually high proportion are unsuccessful. He needs to be read in selection.” (Keith Sagar ed. *D. H. Lawrence: Selected Poems*, 1972, Penguin, p. 11)
- (2) ソシュール、『一般言語学講義』(Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistique Generale*), 小林英夫訳, 岩波書店, 1972.
- (3) *Ibid.*, pp. 28–29.
- (4) “If we count as part of his statement, not only the proposition in its logical paraphrase, but the qualifications which it receives from the poet’s emphasis and the poet’s attitude—obviously the “what” that is stated is stated by the metaphor, *and only by the metaphor*.” (Cleanth Brooks, *Modern Poetry and the Tradition*, Renewed ed., 1967, Chapel Hill, N. C., pp. 15–16)
- (5) 室生犀星, 「靴下」(『忘春詩集』, 大正11年)。
- (6) “The progress of the soul can be seen in terms of a personal quest for identity. How is a man to make harmony and wholeness out of the warring elements that constitute his psyche? This is the basic and universal question, but each man has his own way of approaching it. If he is David Herbert Lawrence, he will be obliged to examine the bitter conflict that dominated his early youth:” (Tom Marshall, *The Psychic Mariner: A Reading of the Poems of D. H. Lawrence*, 1970, Heineman, p. 24)